
夢は狭間へと通じる～分かりやすい～

火水 風地

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢は挟間へと通じる〜分かりやすい〜

【Nコード】

N0216C

【作者名】

火水 風地

【あらすじ】

分かり易くなったかな〜。単に描写が増えただけの気がバリバリします。

「はあ、はあ、はああ、くふう、はあ……………」

追いつかれたら終わりだとは分かっていた。しかし追いつかれてしまった後にそんなことを思ったところで仕方ないということも分かっている。

私を、物を見るような眼で見下ろすそのヒトは、恐らく既に人殺しだ。もう引き返すことのできない世界にいるのだろう。その覚悟の表れなのか表情はもはや人のものではない。

人はこうも変わってしまったものなのだろうか。私を優しく歪んだ瞳で捉えるお父さん。その義眼のように微動だにしない鏡ひとみには既に私の姿は映っていなかった。

悪いな、という謝罪の言葉が私の頭の中で何度もリプレーされる。しつこく脳内に這いずり回るそれは私が耳にする最後の言葉となるのかもしれない。

私には既に、狂い、変わってしまった人に抵抗するだけの体力は残っていなかった。私の乱れた衣服は私の疲労を表しているようにくたびれた皺をいくつも織りなしていた。

不意に迫ったお父さんのゴツゴツとした手。私の中からお父さんとの、そしてお母さんとの思い出が涙と共に滲んでくるように溢れ出てきた。その優しかった手に握りしめられた包丁に、私は自分の意識が薄れるように遠のいていくのを感じた。

ぐっしよりと冷たく濡れた何かが私の身体に絡み付くように張り付いてきていた。それが汗を吸いこんだ布団の感触だと知ったのはすぐ後のことであつた。

思えば先ほど、おはよう、と言われた気がする。たぶんだが、それは母の声だつた。しかしその母は今、私の瞳には映ってはいない。本当に先ほどのことだと思つたのだが不思議なものだ。もしかしたら、母の声だけここに来たのかもしれないが。

ああそうか、ここは挟間なのだ。

唐突に私は理解した。母は未だここには来ていないのだ。もしくはここに来る途中なのかもしれない。それではもしくはここにいる私は死んでしまったのだろうか。殺されてしまったのだろうか。いや、それは恐らく違う、ここは生と死の挟間なのだから……

突然、眼前の光景がその形を不安定に揺らした。私が見る全ての物が上の方から徐々に暗くなつていくのが分かつた。

これはそう、きっと私はここを出るのだ。そして戻るのだ。絶望へと。

全身を取り巻く寒気によって私はその意識を絶望という名の記憶と共に蘇えされた。

私の喉元に突きつけられた包丁には神秘的な光沢が纏わりついていた。

しかしこの輝きは間もなく私の真紅の血によって鈍いものに変わり、そしてそれは私の血が凝固するのと時同じくして光を失うだろう。

私には私が歩んできた人生を自然と振り返るといふ現象は起きなかった。ただお父さんとお母さんの顔が脳裏に浮かんだだけだった。

私の涙で彩られる優しかった手が、振りかざされた銀色の刃はこと共にぼやけて見えた。それが私の首に当たるのを確認すると私は意識が崩れ去っていくのも同時に確認した。

頬に感じる柔らかで温かなぬくもりに私は眼を開いた。見ると、母が私の頬を優しく擦ってくれていた。さっきはいつたいどこに行っていたのだ。それとも、まだ来ていなかったの？

その問いに母はこう言った。

「私はさつきまで彷徨っていたの。………さあ、これから」
ここで何不自由なく、楽しく暮らしましょうね」

その穏やかな物言いの言葉の後に母が独り言のように呟いた台詞
を私は図らずとも聞いてしまった。

「お父さんは抜きでね」

私もそれには同意せざるをえない。

私達は挟間を背後に死へと続く階段を躊躇ためらうことなく昇っていた。
た。

(後書き)

よろしければコメントをよろしくお願いしますです。っていつても一度出しているモノとあまり変わらないですが。よろしくお願ひします！

「おはよう」という言葉があつたとおもいます。それはカオスの中で見つけた明るい方へ向かおうとする母親の気持ちのつもりです。つて何書いてるか恐らくわからないでしょうね。文に意味が通つてるか分からないし。なんていえばいいのか……これは無視してください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0216c/>

夢は挟間へと通じる～分かりやすい～

2010年10月21日21時08分発行